

# エディトリアル

市立恵那病院 副院長 山田誠史

不整脈は一般外来のみならず、救急外来、健診などで非常に多く認められる疾患であるが種類によっては緊急処置が必要な場合も少なくない。また緊急な処置が必要な場合でもその対処に困ることもしばしばである。そして心房細動の治療においてはカテーテルアブレーションの成績が良くなった影響もあるのか、以前ではレートコントロールとリズムコントロールに違いはないと言われていたものがリズムコントロールがベターという報告が多くなっている。今回は診療の状況ごとに非循環器専門医としておさえておくべき疾患、検査、治療方針などを記述していただければどうかと考え企画した。

松野由紀彦氏には健診で不整脈を指摘され外来受診をされた状況について記述していただいた。精査が必要な不整脈、心電図波形の読み方、また詳細な問診の必要性など実際の臨床に即したものとなっている。

荒尾憲司郎氏、西成田亮氏には救急外来、もしくは病棟コールで遭遇する頻脈について記述していただいた。実際臨床をしていて一般臨床医としては一番緊張するのがこの状況だと思うが、頻拍性不整脈に関して、その鑑別、対処法について述べられている。

辻武志氏には脈が遅い、ふらつきといった訴えで受診された際の対応について記述していただいた。3つの異なった疾患による徐脈性不整脈について実際の症例をもとに解説されている。高齢者では特に症状がはっきりしないことも多く、より詳細な問診や(入院している場合は)モニター管理の必要性を再確認した次第である。

次からの3論文は心房細動について記述していただいた。堀井学氏にはレートコントロールとリズムコントロールについて、急性期、慢性期別に薬剤の使用方法などについて解説していただいた。岩澤孝昌氏には心房細動における脳塞栓リスク評価と抗凝固療法の実践について記述していただいた。心房細動患者をフォローしている一般臨床医が最も身近に接する状況がここに当たると思われるが、リスク評価からワルファリンとDOACの使い分け、また周術期や出血の際の対処法など幅広く解説していただいている。小船井光太郎氏、牧原優氏、安積佑太氏にはカテーテルアブレーションについて記述していただいた。治療の歴史から方法の詳細、またエビデンスについても解説いただいている。

いずれの論文も非常にプラクティカルな内容となっており、この特集が一般臨床医にとってある程度自信をもって不整脈診療を行うための一助となることを確信している。